

前史年表篇

## 前史（第一卷）に代えて

編纂委員長 内海勝正

このたび、塾柔道部史の第二巻を編纂するに当り、今日の読者諸君の中には、その第一巻を御覧にならない方が沢山おおいでと思ひまして、明治・大正及び昭和初期の五十六年間に亘り第一巻の史実を要約し、年表の形式に纏めてみました。

どうか、部史第二巻を御覧いただく前に、この年表を一応御目通し頂ければ、百年に亘る塾柔道部史の流れの中に、時代の起伏を通観していただけると思ひます。

この年表は斯る趣旨で作成致しましたので年表としての形式を聊か逸脱して、内容が煩雑になりましたことを御詫び致します。

猶、年中行事中、寒稽古、月次勝負、卒業生送別、新入部員歓迎、秋季大会等は年度により除いた年もあります。特に記録に残す必要のあるもののみ抄載いたしました。更に、この年表を御覧頂く上で吾が柔道部の変遷を辿り易くするため、嘗て羽鳥君が三田評論に寄稿された一文を拝借し拙稿の不備を補わせて戴きました。

## 塾柔道の三つの黄金時代

羽鳥輝久

柔道部の歴史が一〇〇年、私の入部が昭和七年ですから、この目で見た名選手は半分以下です。先ず柔道部史によって明治から昭和初期までを振りかえって見ることにします。

明治三十年代後半から、明治末までが第一期の興隆期であり、その集大成が平賀恒次郎氏、中野栄三郎氏、塚本太作氏、石渡泰三郎氏の東都の四天王を生み出したようです。飯塚茂氏の追想に「東大に杉村あり、慶大に中野あり、一雙の巨豪であった。恐らくその頃の柔道ボーイは杉村に非んば中野に真似た。普通部生え抜きで二番と下ったことのないと言う秀才、怒った顔をせぬ人であった。幼年組にもてた大将である。右跳巻込の名手。どんな乱暴な新入生でも二三回会談すると、之を塾化させ塾風に巻込むという一種不可思議な腕の持主であった。」また石渡氏については「明治四十三年秋の講道館の紅白勝負に紅軍の副将として、同段(三段)の者四人を投げ、その当時学生柔道界の豪の者であった白軍の大将 帝大主将入来君を跳ね飛ばしてしまった。審判していた嘉納師範をして石渡の乱取り勝負の如きは我が講道館柔道の理想に近いと賞嘆せしめた」とあり、更に氏の追想のまとめとして「名人石渡泰三郎、達人山中駿吉、免許中野森蔵」と書いている。吉武吉雄氏の「昭和(四年)天覧試合に現われた三田柔道の真価」の第一部に「普通部一年生の幼年時代から綱町の道場に通い人となり名人となった阿部兄弟、本大会指定選手は何れも当第一流の士のこととしてその力その技その貫録は皆堂々たるものであるが、この間に伍して美しき姿勢にて迫らざる態度と謙譲の美德と沈着の勇気を發揮し、攻防自ら理に従い息を養いつつ一朝隙を見出すや電光石火、形の如く強敵を

投げ、相手の何れもが宙を飛び円を画いて倒れ、その投技の冴えは名刀の切れ味と言うべく、しかもその態度たるや、高風と言わんか上品その物と言わんか、その品位その気位は断然抜群であった」と書いている。この阿部兄弟に代表される大正十年代が第二期黄金時代でありましょう。私が昭和七年幼稚舎六年で綱町道場へ通い始めて、最初の目についた名手はその年に卒業された五島三雄氏（元柔友会長）であります。背は高くないが広くて厚い胸、かたくて重そうな人が、我々の技のまね事がうまくかかれ本当のように倒れてくれるし、有段者同士の稽古では手首を軟かくし腕を自在に使用して攻撃防禦をしておられたのが極めて印象深かったです。講道館の紅白勝負で四段を四人抜きされたのもむべなるかなと思える柔道でありました。次が昭和七年入塾の岡崎俊祐氏です。小さな体全体で相手の股倉へ飛び込む内股は爽快でした。これを主武器として予科高等部対早高学院戦で大将をつとめ五人を抜き敵の大将と引き分けるといふ偉業をなしました。その次が昭和十年に入塾した田岡 協氏です。中野師範をして象の鼻と言わしめた特有の右脚を使つての内股、十分用心している相手もこれで倒すタイミングの取り方は絶妙でした。私が三、四段の頃講道館に稽古に行つて全く歯がたたない人が数人いましたが、そういう人達を宙天高く右脚で跳ね上げるのを見て成程得意技とはあんなものかと感心させられたものです。私の同期では軍鶏をほうふつさせる精悍な赤塚君の大外刈、大内刈、宮内省済寧館で全国の有名五段十六人を選抜して催される供覧試合で決勝へ進んだ藤川君の内股、送足、左右同じにきく跳腰、払腰を持った飛田君等、当時の学生界では一流であったし、夫々特徴を持った名選手だったと思います。明治神宮大会に学部で赤塚、予科で飛田、高等部で藤川が出て準決勝飛田対藤川、決勝藤川対赤塚で藤川が優勝したこともありました。田岡、侯野、赤塚、藤川、飛田、私と五段が六名揃つた昭和十四、五年頃は第三期黄金時代といえるでしょう。これらにまじつて軽妙の足さばきと、完全に崩してからでなければ絶対にかけない綺麗な大外刈を持った山崎君も戦時中の名手でした。戦後では私と一緒に全日本選手権、東西対抗等で活躍した水谷

君、成毛君が印象に残ります。

大内刈、体落しの反対技をもって大きな相手をしとめる小兵の水谷君、どんな相手でもかまわず右の大外巻込に引っかけ成毛君と対照的でした。

これまでは本人が名選手であった人達ですが柔道部の長い歴史の中には消長の波があり、盛り上る時期には必ずこれを育てた名選手がおられるのです。明治末期の平賀、中野、塚本、石渡氏等を出した隆盛のためには秋山孝之輔、堀切善兵衛、金沢冬三郎、柴田一能、中村愛作、吉武吉雄の各氏があり、その方達の努力で相当盛んになったので明治三十九年に飯塚師範が招かれ、皆が更に強くなって行ったものと思います。大正十年代の阿部兄弟の出現を含む隆盛期は育ての名手として松永進一、岩崎清一郎、中野森蔵、森久則の諸氏があげられ、大正五年に師範助手として気鋭の中野正三四段が迎えられております。昭和十年代の隆盛期は今川敏夫、佐久間知三、箱田玄輔、古屋幸三、熊谷喜徳の諸氏に負うところが大きく、昭和十三年に現清水師範が助手として迎えられ四五段連中を相手に連日稽古をつけておられました。終戦後まもなく柔道は学校内からしめ出されましたが塾の柔道を絶やしたくないという部員、若手OBの願いから、柔友会の岩崎清一郎会長、阿部秀助委員等の指導で石渡英二君、私等が学生と力を併せて道場の獲得をはかり、郷里松本で半農半柔の生活をしておられた清水師範に寒稽古だ、合宿だと機会をつくって上京指導して頂いて二十六年の解禁まで続けました。解禁と同時に清水師範に復帰願って二十年代後期と三十年代中頃まで実力に於ても部員数においても一流校となり、福田、宮崎、熊切、山際君等の名選手を生み出すこととなりました。

大先輩中村愛作氏は「諸君が毎日稽古に来るのは柔道そのものをするためではない。第一に体を鍛えること、第二は精神を練ることである。第一は不知不識の間に遂げることができ、第二はそう簡単にはいかない。心掛けによつては全然方向を誤ってしまう。要はスポーツマンスピリットを養って、真の独立自尊の紳士を作り出すことが最大

の目的である」と説いておられます。私も誠に同感で、世の中にはナショナルアマやセミプロが氾濫しているが、わが部は学生アマスポーツに徹して貰いたいと思います。現在の部は強くないし、部員数も少く、決して隆盛とはいえません。部員諸君はいたずらに伝統の重みにおしつぶされたり、学連大会の一部校になること、早慶戦に勝つことといった一年限りの小さな目標にとらわれることなく、発想の原点にかえて一貫教育の利点を生かし、幼稚舎、普通部、中等部、日吉、志木高校と場所は分散しているが、工夫をこらして一体となつての運営を図って貰いたいと思います。明治二十年代の人達が幼稚舎とうまく交流しながら部員を育て明治末期の隆盛期を招いた事実、大正末期の隆盛は普通部、商工出身者が主体であつたこと等の故事にならない、継続的な部員育成に努力をして欲しいと思います。

## 柔道部前史年表

発祥時（明治九年）より部史第一巻発刊時（昭和七年）まで

年月日	記
明9・	<p>塾柔道の発祥 幼稚舎々長和田義郎は、福沢先生の旨をうけ、関口流柔術を舎生に教えた。道場は十八坪三六畳敷で当時三田山上の幼稚舎に附属していた。（発祥の年度に付ては、諸説、区々たるも、鎌田塾長の揮毫額「慶応義塾柔道部の記」には明治十年とあり、同塾長が柔道部史第一巻に寄稿された「和田氏の柔道」には明治七年とあるが、何れにしてもその発祥地である幼稚舎の史実が正しいと見て、昭和四十年十月発刊の「慶応義塾幼稚舎史日録」に基き明治九年発祥説を採用した）</p>
明14・	<p>幼稚舎へ柔術師範を招聘 和田舎長の郷里和歌山より、関口柔心を迎えて柔術師範とし、幼稚舎の課目に柔術及体操を加う。</p>
明20・	<p>講道館柔道の開始 既に講道館に入門して居た、南摩綱夫、小南英策等の塾生が中心となり、有志十余名が、幼稚舎の道場を借りて、講道館柔道を始めた。</p>
明22・	<p>山下師範の招聘 講道館の四天王と称された。山下義韶四段を師範に迎えた。師範は壮時身長五尺三寸 体重一八貫、軽快にして技、神に達した嘉納門下の逸材であった。</p>
明25・1・15	<p>和田義郎先生逝去 午後五時五分逝去された。福沢先生は金森某宛書翰に、その哀惜の心情を「老生は百事をなげうち忙しく致し候義に付き、兩三日中はゆっくりと御話も出来不申」云々と書かれている。</p> <p>体育会創立と道場の建設 体育会創立、会長福沢捨次郎、柔道部長浜野定四郎、創立当時の体育会は剣道・柔道・弓術・野球・端艇・水泳・兵式操練の七部であった。道場は今の塾監局横に新築、四間に九間、四十畳敷にして西と南に棧敷が設けられていた。</p> <p>等級制度を設ける 山下師範の指導に依り、上級を四つに分け、下級を甲乙丙に分け、四級以上を黒帯とし、活法を級に応じて授けることにした、活法の研究は福沢邸で行っていた。</p>

記

録

明 32・3・20	<p>第八回柔道大会 盛大に行はれ、福沢先生は病後にも拘らず、来賓席に臨まれ終了まで參觀された。 柔道体操の供覧 五月恒例の本塾春季運動会に於て柴田一能幹事の指揮で第一種体操の形を行い柔道普及に資す。</p>
明 31・3・20	<p>第七回柔道大会 (部史第一巻二四頁) 塾内道場に於て行われ、部員取組三十三番、招待試合三十一番及び講道館投之形、起倒流表及裏之形の行われた。この記録が体育会柔道部としての最初のものであり、回を溯れば明治二十五年の道場開きが第一回大会となるが記録はない。</p>
明 29・	<p>幼稚舎の柔術を講道館柔道に改む 和田舎長歿後舎長は坂田実氏に代り、柔術は鐘巻流洪谷師範の手で行われたが、指導適切を欠き、衰運に傾いたので中止し、講道館柔道を採用した。</p> <p>この頃、福沢先生は坂田舎長に書翰を送り幼稚舎に於ける柔術の衰微を作興する様、厳しく注意された。柔道部盛衰の最初の一こまとして貴重な資料であるので敢えて書翰の全文を掲げる。</p> <p>秋雨頗る冷気を覚候益々御清安奉拝賀候唐突ながらこゝに申上候は幼稚舎柔術の事なり従前は随分盛に行はれ少年の衛生には申分なき運動、その効或は体操よりも利あらんかと思ふ程の次第、宅の子供なども御蔭を以て近來は目立つやうに丈夫に相成尚此後も怠らぬ様精々注意を加へ居候処幼稚舎の事情は全く之に反し道場へ出席は次第に減少致し近日に至りては往々皆無の事も有之加之、朝とても甚だおそく豚児等が五時頃出席しても小使は尚ほ未だ起きざる事も有之、況んや生徒等は一人の場に出るものなし、渋谷先生と宅の小供兩人とにて稽古を終る時に漸く兩三名の出るあるやなしにてお仕舞に相成候事も有之よし、実に不都合千万幼稚舎は智育よりも体育を專にして小供の発育他に比較して云々と申処に妙味の存することなり、然るに大切なる柔術稽古の事實は右の如しと云ふ、畢竟道場に監督者の不十分なるがゆえか又は他に原因あるか何れに致し候ても此まゝには差置難き事と被存候、或は衆生徒に是れと申す訳もなく忘れたるものか左様なれば時々これを集めて事の大切なる次第を話して聞かしても宜し又或は柔術体操の如きは其稽古恰も自由にして出席も欠席も点に関係なきが故に自然に怠るとあれば何か法を設けて点数に上せて奨励の工風も可有之何れの道にても宜しく此処端を改めて盛に致し度何卒御考可被下候い才は拝顔可申上候得共思付候まゝ勿々走筆如此御座候</p> <p>十月八日</p> <p>坂 田 様 机 下</p> <p>論 吉</p>



明33・1 3・21	<p><b>入部手続の制定</b> 部員二百名に達し、日々の稽古も八、九十名の出入があり日曜日稽古を行う状態となったので、白から規整の必要が生じ、先づ精神要素の涵養と廉恥、礼節を重んずる柔道修業の本旨を明かにし、道場の神聖を保つため袴の着用等を定めている(部史第一卷三八頁)。</p> <p><b>道場の増設</b> 部員増加のため一時新入部員の受付を中止する程となったので、道場を増設し五十二畳敷とした。</p> <p><b>帯色の改正</b> 従来は成年組四級以上は黒、幼年組四級以上は紫、其他は白であったのを、黒は有段者、樺色は有級者、萌黄色は甲組、紫色は幼年組の三級以上、白色は乙、丙組及び幼年組四級以下とした。</p>
11・17 11・23 11・	<p><b>寒稽古</b> 期間は例年の通り、道場の増築に伴い参加者百名を超す。皆勤者七四名。</p> <p><b>第九回柔道大会</b> 増築成った道場に於て挙行、この日玄関には、この頃塾旗に制定された三色旗と日の丸を交叉して建て、場内四周に紅白の幕をめくらしした。試合は七十一組にて何れも二本勝負、午後より諸形の披露あり。</p> <p><b>紅白優勝旗新調</b> 有段者有志の発起に依り、部員其他より寄附を募め、三井呉服店(三越)のデザインで縦二尺、横二尺三寸、紅白塩瀬の生地黒縁をとり、中に塾章ペンと柔の文字を金糸で刺繍し、九尺の長槍を柄とした。</p> <p><b>幼年組級別制改正</b> 従来は五級より初段を、八級より一級とし、紫帯を四級以上に改め幼稚舎生は七、八級とした。</p> <p><b>秋季大会</b> この大会も例年紀元節(春分の日)に行われる大会同様年中行事の一つで、特にこの日は新調の優勝旗が授与されると謂うので参加百名を越え、福沢先生より茶菓を贈られた。紅白試合は各軍四十八名で戦われ、優勝旗は白軍大将諸遊慎吉に授けられた。</p> <p><b>嘉納師範講話会</b> この日講道館主嘉納治五郎師範は三田演説館に於て、講道館柔道の目的、研究上の心得、道徳上に及ぼす影響に於て三時間余講話された後、山下師範を相手に投之形、柔之形を示し、更に山下師範と金沢冬三郎初段の乱取によりその実地を理解せしめ、聴衆に多大な感銘を与えた。</p>
明34・1 2・3 6・2 明35・4・27	<p><b>寒稽古</b> 期間、例年の通り、皆勤者五七名。</p> <p><b>福沢先生の逝去</b> 先生には一月二十五日脳出血症再発し、二月三日逝去せらるる享年六十八才、全塾休学して喪に服す。</p> <p><b>第十回柔道大会</b> 当大会の華は、塾幼年組と講道館幼年組の試合とこれも幼年組の投之形及体操之形第一種の演技であった。他に招待試合四十組は何れも三本勝負で行われた。</p> <p><b>京都遠征(対第三高等学校戦)</b> 創始以来はじめての遠征である。四月二十三日東京発十五時間を要して京都に入る。二十七日武徳殿に於て知事を始め京阪の名士臨席の下、磯貝師範の審判にて三高と対決、二十名の紅白試合は大接</p>

<p>明36・6</p>	<p>6・8</p> <p>戦の末大将同志の決戦で敗る。        早慶混合懇親試合 早慶互に三、四十名、段を合わせて早慶混合の紅白に分けて対戦した、於三田山上道場。        部長更迭 初代部長浜野定四郎老令のため辞任、二代部長として青木徹二就任浜野前部長に対し感謝状及三ツ組銀盃を贈る。        山下師範渡米のため辞任 米国の鉄道王サミュエル・ヒルの招請により渡米されるに当り送別試合を行う。集まる者三〇〇を超え部員より金時計壹個を贈る。        対早稲田大学柔道試合 普通部新講堂二階を試合場とし各々四十五名で対戦、本塾吉武、内股にて早稲田大将河野を降し四名を残して優勝す。(当日早稲田には一名の不参あり。)</p>
<p>明37・3</p>	<p>3・11</p> <p>内田良平師範就任 山下師範の後任として、内田良平四段が柔道部師範に就任された。先生十六才にして天眞館道場を福岡に開き自剛天真流を広め、後上京して講道館柔道を修む。        第十三回柔道大会 当時部員の増加著しく山上道場狭隘のため普通部講道を大会場に使用、当日の試合七八組の他、内田師範・藤崎二段に依る模範乱取、吉武、中村、五月女各初段の投之形、勝負之形の後、飯塚五段(後の師範)の七人掛あり、尚六月十一日三田山上道場に名残りを惜む最後の紅白試合が行われた。        網町道場の竣工 柔友会員吉武吉雄が久留米の南筑武術館、福岡の天眞館を参考に通風衛生等を考慮して設計指導したもので、畳敷百十九、間口八間、奥行十間、北側を床の間とし正面東西に幅一間の棧敷を設け、玄関、下足場、小居室、更衣室、流湯等を附属する約百坪、総工費約五、五〇〇円。工事を請負ったのは福沢家出入の大工で福沢先生を崇拝し、先生の信任も厚かった千住の金杉大五郎親子であった。建築費は塾員及塾生らの約二、五〇〇円、柏崎の牧口義矩氏より五〇〇円、又大工金杉翁からも約三、〇〇〇円の寄附を受け、不足分を塾当局の負担とした。        道場開き祝賀大会 網町運動場の中に、柔、剣、弓の各道場が新設され、器械体操練習場も設けられた。網町道場の開設を祝ふ盛大な祝賀大会が終日行はれた。当日参加者の柔道部員百四名。        幼年組を紫組と改称 幼年組を紫組とし、級別を一級より十級までとし、紫帯は五級以上とした。        夜間稽古の開始 新道場に電灯の設備が出来たので夜間も稽古することになった。</p>
<p>明38・4</p>	<p>11・7</p> <p>新道場の盛況 講道館柔道の普及と日露戦争の大勝による尚武の気運は、新道場に満員の盛況をもたらした。この年二月に九十名、六月に五五名の紅白試合、十月の月次試合には九八名が出場し半日では終らない有様となった。</p>

10・7	10・	11・5	<p>当時十傑と称された人々は、藤崎（箱田）達磨、吉武吉雄、三船久蔵、佐野甚之助、平賀恒次郎、宮部 修、山中駿吉、大塚莊亮、塚本太作、中野栄三郎である。</p> <p>月次試合稀に見る盛況 紫組（幼年組）成年組の参加無級者のみで九十八名、半日では終らず二組に分けて行われたのは例がない。</p> <p>早稲田大学秋季大会 選手十二名を派遣し好成績。</p> <p>講道館秋季大紅白勝負 二段五月女芳三郎、三船久蔵、初段吉武吉雄、福田 竜、平賀恒次郎、宮部 修、黒江潮、山田又司、大塚莊亮、一級中野栄三郎、山中駿吉、薄宗太郎、海江田平八郎、森本利三郎、浜田精蔵、その他合せて三十三名を派遣し、三田柔道の精華を発揮する好成績をおさめた。</p>	明39・2・7	6・11	12・2	<p>内田良平師範退任 明治三十七年以来師範として尽萃された先生には、朝鮮締督府に赴任のため退任に当り餞別勝負を綱町道場に於て行、三本勝負二五組、五人掛二組、十人掛一組、先生と令夫人による勝負の形あり、先生の告別の辞は「吾、多少部に尽したりとせば、それは今後現われるものなり」とて部の将来を戒められた。</p> <p>飯塚国三郎五段師範就任 内田先生の後任として五月師範に就任、（先生明治八年栃木県下に生まれ、十五才慶応義塾に学び、二十六年講道館初段、身長五尺一寸、体重十五貫五百なり、）六月十一日前師範内田先生偶々帰京されたるを機に飯塚師範就任歓迎紅白勝負を行う。</p> <p>第十五回柔道大会 当事は三本勝負制、紫組十一組、招待試合有級者三十四組、有段者十二組更に対招待選手紅白試合各一九名を行う。</p> <p>「武勇」の扁額を道場に掲ぐ 日本海々戦の勇将東郷平八郎元帥揮毫の扁額を道場床の間正面に掲げた。</p>	明40・4	11・10・24	<p>慶応義塾創立五十周年記念 体育会各都は四月二三日より五日間記念行事を催した。柔道部は四月二三日祝賀柔道大会を綱町道場で催した。当日の模様は付て部史第一巻一七四頁の記事を要約すれば……「綱町運動場入口には国旗と塾旗を交叉し、道場の床の間には修身要領の大掛軸を掲げ、蒼勁なる松の大木を飾り、その前を米賓席とした」とある。当日の招待選手には講道館より中野正三初段、徳三宝初段が派遣され、当日の好勝負徳初段と塾の新鋭石渡泰三郎初段の試合は十五分にて引分となった。</p> <p>日蓮宗大学対普通部戦 十月十九日於綱町道場各二十名の紅白勝負大将を残して普通部優勝。</p> <p>対東京帝国大学戦 十一月二四日於帝大道場各二十名帝大は四段三名、三段四名、二段二名、初段八名、段外三</p>
------	-----	------	--	---------	------	------	---	-------	----------	--

5	<p>名、本塾は三段二名、二段七名、初段八名、段外三名、東大大将杉村四段の袈裟固めに本塾大将五月女三段(湯本)敗る。審判は前半佐村四段、後半嘉納治五郎師範。</p> <p>近衛歩兵第三聯隊柔道部を指導 飯塚先生を師範とし湯本三段外二十三名の有段者が、塾より指導に派遣された。東久邇総彦王殿下も稽古に励まれ間もなく初段の実力に進まれた。爾來数年塾柔道部の大会には選手を派遣し、賞品を寄贈された。</p> <p>紫組を再び幼年組に改む どうした理由で改めたのかは判然としないが、幼年組は子供の頃から塾の道場で稽古をした連中で当時五十余名、塾柔道部の本流を以て任じていた。</p>
明41・2	<p>豪華な賞品 塾内に於ける柔道の普及度はこの頃をして最高と見るべく、当時大会に寄贈された賞品も誠に豪華にして、二月十六日の卒業生送別紅白勝負に於て優勝選手に授与された賞品を一例として左に掲げれば</p> <p>体育会々長並に柔道部長寄贈 稽古着 三着</p> <p>近衛歩兵第三聯隊将校団寄贈 大型ナイフ 一丁</p> <p>内田良平師範寄贈 日本刀 二振</p> <p>朝日新聞社寄贈 賞牌 一個</p> <p>その他となっている。</p>
明42・11・14	<p>部長の更迭 青木部長退任の後、福沢三八第三代部長に就任、新部長は福沢諭吉先生の三男にして塾教授。</p> <p>新旧部長送迎紅白勝負 午前午後に亘り、一五〇名を越す紅白勝負に統いて、平賀恒次郎対中野栄三郎の三本勝負(引分)及中野・塚本両三段の九人掛等が行はれ、新旧部長に対する歓迎と感謝の一日を過した。</p> <p>第十七回大会 午前中の紅白勝負は総勢七十名、各々四級を大将に行われ、午後は招待試合五十二組と形の披露あり。</p> <p>柔道部後援会設立 同会規則第二条に「本会は柔道部師範優遇を以て目的とす」とある。当時体育会は財政難のため、先生の月給は僅か六〇円であった。柔道部としては先生に無理に師範になって戴いた事情から、先生の熱意に報ゆるため、青木部長を会長に金沢、石渡両先輩を顧問として運営された。これが現在の三田柔友会の前身である。</p> <p>浜野定四郎初代部長逝去 元塾長で、亦初代の柔道部長であった浜野先生が逝去され、全塾臨時休校して先生の霊を悼う。</p>

2・21	卒業生送別紅白勝負 出場者九十七名。 新入生歓迎紅白勝負 記録には只紅白勝負とあるが恐らく新入生歓迎として間違いない。この紅白は百名以上の大会で、優勝者古川甚一、平岡義夫に近衛歩兵第三聯隊より置時計、同じく松村松之助、山本誠一、近藤 久に松沢稽古着店寄贈の稽古着が贈られた。
11・23	第十八回大会 部員の紅白勝負は五十名、宛に分れて対戦、体育会幹事による紅白五名づつの勝負等を午前中に終り、午後は二本勝負に依る招待試合が有級者四十八組、有段者十六組行われ、その間に投之形(塚本(3)、中野(4))、勝負之形(塚本(3)、石渡(3))、五之形(中野(4)、平賀(4))、固之形(松尾(2)、古川(2))、柔之形(永滝(2)、平岡(2))、内田氏勝負之形(藤崎(3)、吉武(4))が披露された。
明43・2・24	第一回普通部対商工学校紅白勝負 於綱道場、両軍各二十名、普通部大将菅井国之助は商工副将設楽哲夫、大将下川健太郎を大外刈に敗って普通部が優勝した。爾後この対抗試合は定期戦として行われた。
5・	部長の更迭 福沢部長退任に伴い、四代部長として堀切善兵衛・部長に就任、先生は明治二十九年より三十六年頃部員として又幹事として活躍、卒業後塾留学生として欧米に学び帰朝後、塾の教授であった。
5・29	新旧部長送迎並に新入部員歓迎紅白勝負 参加者百三十八名、当日抜群選手二谷丑之助(十二人) 新旧部長より稽古着四着、毛布等贈らる。
9・25	道場床下に弾機(スプリング)を装置 従来は反響効果のため、カメを数個設置しただけで床は固定していたものを緩衝用にスプリングを床下に装置した。七月十五日より九月十日までの夏季休暇中工事を行い、九月二十五日完成祝いの紅白勝負を行った。稽古の具合頗る良好とある。
明44	年中行事益々盛況 寒稽古に始まる、吾が柔道部の年中行事は、例年通りの次第で盛大に行われた。即ち寒稽古皆勤者百十六名精勤者六名。卒業生送別紅白勝負参加者百三十四名。秋の第二十一回大会には、各四十二名の紅白勝負に六〇組の招待試合を行っている。
10・29	第二回普通部対商工学校紅白勝負 第二回大会に於て行われ、商工学校大将下川健太郎が普通部の大将以下四名を倒し、雪辱を果たした。
5・5	「柔道部々報」発刊 年三回発行、五十頁内外、発行部数二百、会員は先輩五十名、部員百五十名、会費は毎号十五銭、その内容は、論説、文芸、通信及記録集であったが、大正七年四月発行の第十三号を以て廃刊となった。

明45・1	寒稽古 期間一月十日より二月十一日まで、参加百二十八名
6・2	第一回本塾対四校連合試合 連合の四校とは日蓮宗大学(立正大学)、水産講習所(水産大学)、農業大学、高等工業学校(東京工業大学)で、当時各校共飯塚先生が師範であった。その上塾柔道部長でもあった柴田一能先生が日蓮宗大学の教頭であり、更に明治四十年代塾で活躍された山中駿吉、宮部、修等の先輩及び予科或は普通部から農大又は工大に転校して居られた縁で、この対抗試合を定期戦として計画実施されたものである。
大1・11・3	第一回対抗試合は六月二日、綱町道場に於て行われた。連合軍五十九名(日宗大十三、水産大十二、工大及農大各十七)に対し、本塾軍六十二名、両軍各々三段一名初段五名以下有級者であった。この試合は塾の四将池野初段が、連合軍大将金沢式段を跳腰に倒して優勝を飾った。
大2・2・16	第二十二回秋季大会 紅白試合の後、第三回普通部対商工学校の定期戦を行う。勝敗は普通部四名を残して勝つ。
5・4	卒業生送別紅白勝負 試合出場者七十八名
5・31	新入生歓迎紅白勝負 試合出場者百名
10・3	第二回四校連合対抗試合 綱町道場に於て行われた。両軍選手各六十八名塾の四将高橋 篤三段が連合軍大将坂田(農大)を倒して優勝す。
大3・1・8	第二十三回秋季大会 幼年組、成年組の紅白試合の後、第四回普通部対商工学校の定期戦あり、商工学校副将山本忠晴・跳腰鮮かに普通部大将松永進一を敗る。
2・15	寒稽古 例年の通り、皆勤者は幼年組二十六名、成年組六十九名、有段者十名
5・10	卒業生送別紅白勝負 試合出場者八十九名。
5・17	新入部員歓迎紅白勝負 試合出場者八十五名。
10・31	第三回本塾対四校連合試合 綱町道場に於て行われ、双方各七十九名三段四名、初段十名、以下有級者、試合は大将同志の対戦となり、塾大将徳永秀史式段は連合軍大将坂田式段(農大)の立つ瞬間を左大外刈に降し三連勝を飾る。
11・15	第二十四回秋季大会 十月三十日恒例の幼年・成年各組の紅白試合に始まり、第五回普通部対商工学校の定期戦は、商工副将竹内広吉が普通部大将西沢久一郎と引分け商工は大将茂木信太郎を残して優勝した。
	本塾対高等師範対抗試合 十一月十五日高等師範の挑戦に応え、大家の高師講堂に於て、嘉納治五郎師範及三船久

<p>蔵五段審判の下、午後一時試合開始、両校選手各二十九名なり。試合は接戦の末、塾の大將飯塚 茂参段、高師の副將杉山参段を絞めに打ち取り、大將岡部四段と対し、激戦時間に至るも決せず、この時審判嘉納節範は時間を延長して勝負を決せん旨を宣し、延長概ね二十分合技に惜敗す。試合時間は有級者七分、有段者八分、副將十五分、大將二十分なり。</p>	大4・1・18
<p>寒稽古 例年の通り皆勤者百名、精勤者四名          商工学校甲信上州地方遠征 一月八日より五日間幹事岩崎式段監督の下、選手十三名（一級四名、二級三名、四級二名）甲府、諏訪、長野、上田、太田を転戦、二勝三敗          卒業生送別紅白勝負 紅白試合出場者百四名          新入部員歓迎紅白勝負 紅白試合出場者九十七名</p>	2・21
<p>第四回四校連合対抗試合 綱町道場に於て行われ、双方七十七名にて対戦、塾の三將岡善次式段は、連合軍大將真島参段を左跳腹に屠り、大將中野森蔵、副將坂東舜一の二名を残して優勝す。</p>	5・8
<p>第二十五回秋季大会 普通部対商工学校定期戦は第六回を迎え、普通部二勝三敗の負け越を挽回せんものと、激戦の末、普通部の四將中村武雄、商工の大將岩井 茂を背負に投げすてて勝ち、勝敗を対にした。招待試合は三本勝負で行われ、有級者四七組、有段者十五組。</p>	10・31
<p>飯塚師範就任十周年祝賀会 慶応義塾柔道部史第一巻の記事より当時を偲べば次の如くである。          『祝賀会の報一度伝わるや、来つてこの会を盛大になすこす旧師に対する報恩の道なれと、遠く九州よりは箱田達磨氏、神戸よりは平賀恒次郎氏、大阪よりは石渡泰三郎氏、千葉よりは中野榮三郎氏、その他中村愛作、湯本芳三郎、吉武吉雄、山田又司等の諸氏を始め、全国津々浦々より来り会する有段者殆んど四十名、実に近來の盛事にして、以て先生の人格徳望の一般を知るに足るべし』下川記</p>	11・7
<p>祝賀式典の後、先輩対現部員の紅白勝負あり現部員の勝。          横浜電線（古河電工）と塾柔道部 今の古河電工、当時の横浜電線は神奈川に本社があり、所謂面倒見の好い先輩が大勢居られた、そのクラブの中には相当広い道場があったので、学生等は試験休みなどに時々押し掛けて、先輩と稽古や掛勝負に打ち興じ、クラブの食堂で御馳走になるのが楽しみであった。横浜電線には吉武吉雄四段、古川甚一三段を始め、各部の先輩が務めの余暇に道場に集まって、稽古を楽しんで居り、一方、綱町道場を稽古に集る</p>	

10・31	5・8	5・28	大5・1・11	中村愛作、湯本芳三郎兩四段を始めとする十数名が、三田柔道倶楽部と称して先輩同志の親睦を計っていた。この両者の間に時々対抗試合が行われる様になり、第一回を三月十四日綱町道場で行い、第二回を六月二十七日横浜電線道場で行ったが何れも横浜方が圧勝し、第三回は十月三十一日第二十五回秋季大会の日に行われ、東京方が雪辱を果している。この間、後の横浜市長であり日本スポーツ界の育ての親であった先輩平沼亮三氏は自ら横浜方の大将として出場、又明治末期の塾野球部の名投手、菅瀬一馬氏、同じく名外野手として活躍された、肥後英治氏等の奮戦はさすがに当時の万能選手時代を思わせる。
			1・7	寒稽古 本年は期間を二十日に短縮して行われた。皆勤者九十六名、精勤者四名。
			2・13	普通部東北遠征 一級二名、二級十名を以て遠征、太田原中学、竜ヶ崎中学に勝ち、仙台一中、相馬中学に敗る。
			4・30	飯塚師範七段に昇進
			4・11	卒業生送別紅白勝負 出場者九十一名、試合終了後、見晴亭に於て送別会あり先輩以下五十一名出席し、盛会。
				新入部員歓迎紅白勝負 出場者七十六名、午後六時より恒例の茶話会と種々興が催された。
				中京、関西遠征 一週間の予定で、静岡、名古屋、京都、大阪、神戸を試験休みの腹ならしのつもりで出かけた遠征が、京都では京都帝大、同志社、武専連合の全京都と、又大阪では武徳会中心の全大阪との試合に発展してしま
				い、両試合共に無残なる敗北であった。当時の感懐を時の主将中野森蔵氏は「實際此の遠征は柔道部の空気を一変した、爾來吾々は自力更生に志し、協力一致 阿部兄弟、崔、福田等の如き有望なる幼年組の育成に注ぎ、真剣なる猛練習を進めること、一年有半、遂に第二回(大6・9・21)の遠征には、京都軍には勝味の引分け、大阪軍を破り、神戸軍とは引分けの成績を取め、更に第三回(大8・8・9)の遠征に於ては遂に関西軍全部を降服せしめた」とある。
				第五回四校連合対抗試合 於高等工業道場、敵副將野呂三段(農大)は二人抜いて、塾の副將岡 善次三段と対す、岡三段大外刈の合技にて野呂を屠り、続く大将真島三段(農大)を左跳腰に打ち取り、大将中野森蔵三段を残して勝つ。
				中野正三四段師範助手に就任 講道館に於て「跳腰の中野」とその卓越せる妙技は当時嶄然斯界に頭角を現わして居られた先生を迎え、塾柔道部の充実に必要な力となった。
				第二十六回大会 幼年組、成年組の各紅白勝負に続き、普通部対商工学校の定期戦あり、普通部二名を残して優



勝、招待試合は三本勝負にて行われ、有級者三十六組、有段者二十四組。	大6・1・4	甲信越遠征 普通部は岩崎清一郎、松永進一監督、商工学校は中野森蔵、神崎清一監督の下甲信越え別々に遠征、普通部は六戦全勝、商工学校は四戦三勝一分。
	1・13	寒稽古 再び期間を三十日間とす。精勤者五名、皆勤者七十名。
	2・18	卒業生送別紅白勝負 参加者九十四名、師範助手中野正三四段及津築 純二段の五人掛
	5・6	新入生歓迎紅白勝負 出場者六十四名、師範助手中野正三四段十人掛、阿部英児初段の五人掛あり。
	6・3	第六回四校連合対抗試合 互に六十七名宛での紅白戦、塾は大將松永進一以下三名不戦にて勝つ。
	9・21	関西遠征 四段中野森蔵、三段岡善次以下二段八名、初段十名、一級十名、世話係三名の計三十三名。対武徳会本部、引分。対武徳会大阪支部二名不戦勝。対神戸柔道有志会引分。
	10・30	第二十七回大会普通部対商工は大將阿部大六を残し普通部の勝、招待試合、有級者三十二組、有段者十九組
	大7・1・13	寒稽古（今年より火鉢を備える）期間例年通り、四時三十分開始、本年東京の酷寒にて市内水道管の破裂一〇〇〇件に及ぶ。
	2・17	卒業生送別紅白勝負 参加七十八名。
	5・5	新入生歓迎紅白勝負 参加四十九名。
	6・2	第七回四校連合対抗試合 大將藤沢三段を残して勝つ。於水産講習所
	10・31	第二十八回大会 普通部対商工学校定期戦、普通部の勝 招待試合有級者三十八組、有段者二十一組。
	大8	寒稽古記録なし。
	2・11	卒業生送別紅白勝負 参加百十九名
	5・4	新入生歓迎紅白勝負 参加八十七名
	6・1	第八回四校連合対抗試合 引分 記録に依れば連合軍八十九名に対し塾は九十三名で対している。四名差があるが当時は人数に今日程こだわらなかつた様である。
	6・6	有段者塾内月次試合
	6・21	普通部対攻玉舎戦 普通部の大將山川 涉初段、敵三將より大將まで抜いて大勝す。
	8・9	関西遠征 飯塚師範、中野師範助手以下四十九名。塾対全京都軍、於武徳会本部、互に四十八名中堅の下村良三初

10・31	<p>段は八人抜群、大将松永四段以下四名を残して勝。塾対全大阪軍 於武徳会大阪支部、互に四十八名、山川涉初段（昭和四年天覧試合府県選士）の活躍に依り大将以下八名を残して大勝した。</p> <p><b>第二十九回大会</b> 普通部対商工学校定期戦、普通部勝、招待試合、有級者二十一組、有段者二十五組</p>
大9・1 5・2 6・6 11・7	<p>寒稽古及卒業生送別紅白の記録なし</p> <p>新入生歓迎紅白勝負 参加八十七名</p> <p><b>第九回四校連合対抗試合</b> 於農大道場、相方九十九名宛、塾副将浅見浅一二段、敵大将川村三段と引分、大将菅原浩三段を残して勝つ。</p> <p><b>第三十回大会</b> 普通部対商工学校定期戦は普通部大将浅見浅一二段が五人抜、商工の大将高田庫重初段と引分、（浅見は前記六月六日の四校連合に於ては普通部生でその副将に出場、昭和四年の天覧試合では阿部兄弟と共に指定選手として出場している）</p> <p><b>飯塚国三郎師範在職十五年祝賀大会</b> 綱町道場はこの日午前九時地方からの先輩を加えて立錫の余地なき盛況、祝賀式典後、九十九名の幼成年組、合同の大紅白勝負、先輩対現部員の試合等、先生に対する感謝の心をこめた試合が行われた。</p>
大10・1 2・11 4・ 5・8 6・5 10・31	<p>寒稽古 記録なし</p> <p>卒業生送別紅白試合 参加七十七名。</p> <p><b>部長の更迭</b> 明治四十三年以来、概ね十二年間部長として幾多俊英の育成と塾柔道の發展に尽瘁された堀切善兵衛部長が此の度政界に投ずることとなり、その後継者として在塾当時は柔道部の名幹事として、明治三十三、四年頃活躍された柴田一能教授が新部長として就任された。柔道部史第一巻に於て「氏は快弁、諧謔、詩吟、今尚昔日の如く、人を楽しまして自から決然たる、能くその一面を窺ふに足るべし」評している。</p> <p><b>新入部員歓迎紅白試合</b> 参加者百三名、五人掛は小山内信三段、阿部英児、阿部大六、松永進一各四段で大会の白眉であった。</p> <p><b>第十回四校連合対抗試合</b> 於綱町道場、各々八十四名、塾の大将五島一雄三段、敵の三将鈴木二段（高工）を小外返し、副将大久保二段（農大）を内股に降し、大将川村三段（農大）と引分。</p> <p><b>第三十回大会</b> 普通部対商工学校定期戦は、浅見浅一対古田武太郎の大将同志で引分、招待試合は有級者二十九</p>

組、有段者十六組。	大11・1	寒稽古 記録なし
	2・11	卒業生送別紅白試合 参加八十四名阿部英児四段の十四人掛は僅か十九分であった。
	5・	新入部員歓迎紅白試合 参加六十八名
	6・	第十一回対四校連合試合 日時場所記録なし、今回は四校の内、農大参加せず、塾七十六名連合七十三名、塾は八名を残して大勝。
	10・31	第三十二回大会 普通部対商工は二人残して商工が勝つ。招待試合は有段者二十一組、有段者二十四組
	大12・1	寒稽古 記録なし
	2・11	卒業生送別紅白試合 紅白試合に出場せる有段者四十四名、卒業生の掛勝負では、阿部英児、大六兩四段の十五人掛あり。
	5・13	新入部員歓迎紅白試合
	6・9	第十二回四校連合対抗試合 於日蓮宗大学（立正大）両軍は各百名余に上る大試合は又大接戦となり三将菅原 卓三段が連合軍大将大石三段（水産）を降して勝つ。両軍有段者は各六十名内外である。
	9・1	関東大震災に部員・道場共無事 この日、秋の対東京帝大戦に備えての合宿第一日、午前中の稽古を終えた三十数名が山上の万来舎での昼食に集まった直後、大地動転の大地震が起り、山上の校舎は瓦を降らし、図書館の硝子は飛散し、壁に亀裂を生ずる惨状であった。部員は稲荷山に避難し、第二第三と続く地震の静まりを待ち、冷くなつたピフテキとコーヒーで昼食を済ませて解散する頃、市内各所から火煙が揚る。翌日より部員は再び道場に集り、稽古着に身を固め三田附近の警戒に当り住民の感謝を受けた。この大震災火災の中、部員にも只一人の負傷者もなく、綱町道場も全く損傷なかった。
	11・23	第三十三回大会 普通部対商工学校の定期戦は引分、招待試合有段者十七組、有段者二十組。
	大13・1	寒稽古 記録なし
	2・3	卒業生送別紅白勝負
	5・	新入生歓迎紅白勝負
	6・7	第十三回四校連合対抗戦 相方八十六名、四将五島次雄が連合軍大将三浦（水）を足扨に倒して勝つ。

10・31	10・22	6・5	5・9	5・	3・20	2・11	1・	大15	11・22	10・31	9・	6・13	5・17	2・8	1・	大14	10・
第三十六回大会 普通部対商工学校定期戦、商工副将安田、普通部三将、副将を倒し大将と引分けて勝つ。	本塾予科高等部対東北学院對抗戦 互に十名、本塾副将中本三段、学院の大將佐藤三段と引分け、大将桐山三段を 残して勝つ。	接戦の未連合軍大将吉原三段と本塾副将中本吾二三段引分。大将岩崎三郎三段を残して勝つ。	新入部員歓迎紅白勝負	第十五回四校連合對抗試合 於綱町道場、各八十五名（試合時間・段外四分、有段者五分、副将八分、大将十分）	三田柔友会の発足 明治四十一年当時、師範に対する塾当局からの待遇、必ずしも充分でなかったため、師範に対す る物質的援助のため発足した慶応義塾柔道部後援会は約十八年を経て漸く改善、発展の必要が議され、名実共に三田 柔友会が誕生した。青木徹二氏を会長に金沢冬三郎氏等二十一名の先輩を顧問とし石渡泰三郎氏を常任顧問とした。 会規約第二条の目的に「本会へ会員相互ノ親睦ヲ旨トシ、義塾体育会柔道部伝来ノ精神ヲ維持シ、同部ヲ後援指導 シ以テ義塾々風振興ノ本源タランコトヲ期ス」とある。	卒業生送別紅白試合 各十五名、三名残して勝つ。	本塾予科対水産講習所對抗試合	寒稽古 記録なし。	飯塚・中野両師範勤続祝賀大会 飯塚師範在職二十年、中野師範在職十年。部員六十余名に依る紅白、先輩対現部 員紅白等祝賀行事行はる。	第三十五回大会 普通部対商工学校定期戦は商工の三将正田正男は普通部の三将以上を跳腰に屠り大勝。	この遠征は陣容から見て塾軍に相当の自信があった様だが、結果は将に惨敗に終わった。	関西遠征 浅見浅一五段、阿部芳郎四段を正副将に三十有余名、対京都武専不戦六名負。対全大阪不戦十一名負。	第十四回四校連合對抗試合 相方各九十一名、於農大道場、大将岩崎三郎三段、連合軍副将三浦（水）と引分で敗退	卒業生送別紅白勝負	寒稽古 参加六十二名	第三十四回大会 普通部対商工学校定期戦は引分、招待試合は有級者二十九組、有段者二十組。	

昭2・1	2・2・11	2・5・8	2・6・18	7・14	10・30	10・14	10・14	2・19	5・13	6・	10・27
寒稽古 記録なし	卒業生送別紅白勝負 出場者八十二名。	新入生歓迎紅白勝負 出場者七十名	第十六回四校連合対抗試合 於立正大学講堂、出場選手各七十名、塾 副将古賀 徹三段は敵副将まで三段三名を倒し、大将と引分塾は大将桐山勝治三段を残して勝つ。	第三十七回大会 普通部対商工学校定期戦は、普通部四名残して勝つ。	夏季九州遠征 七月十四日より三十一日まで、飯塚師範以下二十六名(普通部生五名含む)時あたかも北九州に於ては、高等学校争覇戦、中等学校優勝戦に加え福岡熊本対県試合を前にして多くの選手が福岡に集っていた。稽古は主に修猷館道場を借りたが思い掛けない張り切った稽古が出来たことと中学の有望選手に塾入学を勧めることが出来たのは、大きな収穫であった(五島次雄誌)	東北武者修行 十月十四日より十九日まで、参加者十名(岩崎三郎、五島次雄、中本吾一、古賀 徹、桐山勝治、山形鳳二、伊達 浩、松下春三、堤 武男、加藤靖夫)仙台、秋田、鶴岡、新潟、長野、上田、連日好天氣に恵まれ、日頃鍛錬の腕前を十二分に發揮出来た事を祝福しあい、上野で解散。(古賀徹誌)	寒稽古 二月十四日まで三週間、午前四時半より、参加百三十名、精勤者八十名、精勤者四名の他、三田柔友会より柔の友賞を精勤者に贈られた、亦終了式には林塾長が臨席された。	卒業生送別紅白勝負 参加百十名、先輩対現部員試合は先輩軍大将阿部英児五段が現部員軍の三将五島次雄四段副将岩崎三郎四段を降したが大将浅見一五段に敗れた。他に卒業生浅見五段の十人掛、蟻木、中本四段の八掛あり新入部員歓迎紅白勝負	第十七回四校連合対抗試合 日時場所不詳、互に五十名、中堅木下草作一級は敵初段八名を抜き、塾五名を残す大勝の因をなす。	三田柔友会関西支部を設く。吉武氏の尽力に依り三田柔友会関西支部が設けられ、本部と連絡を保ち柔道部に対する物心両面に寄与することとなった。	第三十八回大会 今回は秋に早慶を控えているので、恒例の招待試合を中止し、これに代えて、本塾予科対水産講習所の試合を行う。この一戦でも木下草作初段は見事な技で敵五名を投げ、塾予科は七名を残して勝つ。普通部対商工学校定期戦は今年普通部に編入の渡辺重男二段を大将に据え、商工の副将、大将を寝技で降して勝つ。

第一回本塾予科高等部対早稲田第一・第二高等学院対抗試合 時事新報社並に報知新聞社後援の下に陸軍戸山学校道場に於て、小田常胤六段の審判で行われた。

先鋒	樋口 良作(初)	引分	先鋒	松本 鶴吉(初)	引分	伊藤 傑(初)	引分	田中榮三郎(2)
	城崎榮之助(初)	引分		彦坂宏三郎(初)	引分	○谷口宇多太郎(初)	大内刈	船越 茂(2)
	佐野 隆則(初)	引分		田崎 誠次(初)	引分	谷口	引分	坂口 太郎(2)
	富沢 康吉(初)	引分		三輪榮三郎(初)	引分	高浪忠八郎(2)	引分	根本 実(2)
	友田善二郎(初)	引分		杉本日出吉(初)	引分	杉山 嘉雄(2)	引分	前田 貞一(2)
	谷 宗兵衛(初)	引分		赤山 政治(初)	引分	龜山 俊衛(2)	引分	天野 三雄(2)
	大山 元(初)	釣込足		○吉田 啓(初)	引分	加藤 靖夫(2)	内股	○伊勢 治(3)
	○木下 革作(初)	釣込足		吉田	引分	片山 正周(2)	引分	伊勢
	木下	引分		泉 忠保(初)	引分	安東喜四夫(3)	引分	尾崎 西郷(3)
	横田喜一郎(初)	引分		長沢 義弘(初)	副将	黒崎 義衛(3)	引分	八田 一郎(3)
	○富田 忠三(初)	押込		小椋 菊寿(2)	大將	五島 三雄(3)	不戦	
	富田	引分		土倉 尚之(2)				

昭4・1・14

2・10

5・4

寒稽古 三週間に亘り毎朝四時より開始された。本年は五島次雄君に対し三田柔友会より、寒稽古の十年間精勤並に柔道部に対する貢献大なるを以て記念品が贈られた。

卒業生送別紅白勝負 恒例の卒業生十人掛は、二段四名、初段三名、一級三名を古賀徹四段が二十分、岩崎三郎四段が三十分、門倉 森四段が十三分で何れも完勝した。

御大典祝賀武道大会(天覧試合) 天皇即位の御大礼を祝う武道大会は端午節句をトして行われた。数ある日本武道の中から柔道と剣道に限られ、出場選手は指定選手と府県選手に分け、前者は宮内省に於て山下、磯貝、永岡、飯塚各八段、佐村、田畑各七段の委員に依って、主として武道専門家中より柔剣道各々三十二名、後者は府県知事に依り管内の武道専門家を除き選手一名を選出せしめて柔剣道各々四十九名が厳選された。指定選手は何れも斯界の權威で、多くは専門家である中に塾出身の阿部大六五段(東邦電力社員)阿部英児五段(大日本製糖社員)浅見浅一五段(満鉄社員)が加えられた。府県選手の中にも大阪府代表として塾出身の山川 涉五段(大同電力社員)が選ばれた。

第一日(五月四日)は皇居内濟寧館に於て行われ、指定第三部に出場の阿部大六五段は、白井清一五段(柔道師範)を跳腰返、尾形源治六段(山形高校師範教士)に押込まれたが、古沢勘兵衛五段(京城警察講習所師範教士)払腰に投げて次点者となった。指定第四部の浅見浅一五段は小谷澄之五段(大連工專師範)と激闘(二〇分僅差に破れたが続く末次哲郎六段(山口師範教諭)を大外刈に破ったが、佐藤金之助六段(警視庁師範)の足払に破る。

指定第六部の阿部英児五段は山田行正六段(満鉄師範)を僅か三十五秒手練の送足払、次の後藤素直五段も鮮かな足払、続く天野品市六段(師範)は前試合中負傷のため不戦勝、準々決勝に進む。準々決勝は岡野幹雄五段(京城警察講習所師範)と組む、岡野の鋭き足払、絞技をかわし、払腰、大外刈に押しつつ虚を衝く小内刈一閃、遂に明日の御前試合の準決勝に進む。

府県第三部の山川 渉五段は、三重の中尾健二郎三段を大外返、宮崎の太田清一初段を釣込足、静岡の蓼原宗一四段を釣込足に技有と取ったが蓼原四段は前試合で受けた傷のため中止となり優勝。第二回戦は、富山の関口保平二段に判定勝、宮城の富木謙治五段は激戦中負傷、判定の結果山川五段の優勝となり明日の御前試合に進む。

第二日目は天皇の臨御を拜して旧三の丸覆馬場に試合場を改めて行われた。府県選士、山川五段は福岡の大兵剛力五尺八寸の木原久夫四段に対す、山川五尺四寸の小兵なれども堅腰以て釣込腰を連発して攻め更に左内股にゆこうとするを木原後帯を取って右大腰に決める。

指定選士阿部英児五段は京都武専教授にして武徳会柔道を代表したる強剛、栗原民雄六段(天覧試合優勝者)と対す。阿部姿勢正しく立ち合うも栗原は左半身に構えて阿部の水月(水おち)を突く如く取り阿部の払腰、大外、足払の動きを封ずる姿勢、相方技充分ならず、栗原技に入らんと膝をつき、阿部組手を払い服装を整えんとする、その背後より栗原猛然と飛びかかり咽喉に迫る。阿部倒れてこれを防いで乱闘、阿部口辺を切り又栗原の指が眼に入るもよく逃れ審判員の「別れて」にて立つ栗原一拳に勝ちを制せんと力攻するも、阿部騒ぐあしらい時間となる。審判員栗原の優勢勝を宣す。

阿部兄弟の御前試合出陣に當って、母堂優子刀自は「昭和四年五月四日兄弟打揃いて御前試合に召されけるをうれしみて」雲井まで、のほるも嬉し松さかに「すたちし田鶴のつばさならべて」「かたすとも、よしや岩根の男子松、つゆもみだれぬ心し見ゆれ」の二首をよんで贈られている。

新入部員歓迎紅白勝負 阿部英児五段の七人掛は農大柔道部の初段三名、二段、三段各一名、四段二名を掛け時間九分。

11・18	11・2	6・14	5・11	2・11	昭5・1	寒稽古 記事なし	卒業生送別紅白勝負	新入生歓迎紅白勝負	第十九回四校連合対抗試合 於綱町道場、各々五十一名、接戦の末大将を残して勝つ	第四十回大会 恒例の幼成年組紅白勝負に始まり、二十六組の招待試合、普通部対商工学校定期戦は二名残して普通部勝つ	第三回本塾予科高等部対早稲田第一・第二高等学院対抗試合 於文理科大学、審判小田常胤六段、各々二十名
11・17	11・11	10・16	6・8	5・25		本塾高等部対横浜高商 各々十五名 於綱町道場 大将、副将を残して勝つ	第十八回四校連合対抗試合 於農大道場、各々四十五名、中堅奮戦して七名を残して勝つ。	第三十九回大会 普通部対商工学校定期戦は普通部大将渡辺重男は商工大将南 晃を内股に投げ普通部優勝	本塾予科高等部対国士館専門学校対抗試合 於綱町道場、各々二十五名大将を残国士館の勝	第二回本塾予科高等部対早稲田第一・第二高等学院対抗試合 於陸軍戸山学校、審判小田常胤六段、各々二十名。	
						先鋒	門田 重夫	背負投	早稲田	樋口 良作(初)	引分
						鈴木 俊吉	引分	田崎	横田喜一郎(初)	技不詳	
						吉田 重成(2)	引分	木下 革作(2)	引分	○小田佐太雄(初)	
						峯岸 弘次(初)	引分	杉山 嘉雄(2)	引分	小田	
						小田部春次	引分	富田 忠三(2)	引分	吉田 啓(2)	
						野田 一(初)	押込	○上妻 利男(2)	技不詳	赤山 政治(2)	
						古張 信次	引分	上妻	渡辺 不蔵(2)	三輪栄三郎(2)	
						新堀 昇三	引分	大将 崎 幸男(3)	引分	田中栄三郎(2)	
						城崎栄之助(初)	引分	副将 片山 正周(3)	引分	泉 忠保(2)	
						大山 元(初)	引分	引分	引分	根本 実(2)	
						佐野 隆則(初)	引分	不戦	引分	伊勢 治(3)	
						加藤 靖夫(2)	引分	大将 杉本日吉(2)	引分		

(段位表示なきは段外者)



昭6・1・14

11・12

寒稽古

一月十四日より二月三日まで三週間に短縮、開始時間も三十分繰り下げ五時より又始業時間に間に合う

青木徹二

三田柔友会長逝去

後任会長に金沢冬三郎君就任

其後の早慶對抗戦の実施を不可能にする遠因となったとも考えられる。

此の試合には後味の悪い二、三のトラブルがある。その一つは試合の打合せに於て早稲田側は突然、恒例の十一月中旬開催を十月十七日に行うべし、応せざる時は中止もやむなく、その責は慶応が負うべきであると強引に主張した。塾側は事理を明かにして再考を求め十一月十八日に決定したが、当時の塾軍は不幸負傷が続出し大将崎は足の負傷でほとんど稽古が出来ず副将上妻も足を腫らして入院手術し、三将沖も又手足を痛め充分稽古が出来ない状態にあった。斯る塾軍の弱点を衝いて勝負を挑み一勝一敗の後一挙に雌雄を決せんと企らんだと考える以外全く操上げ開催を主張した理由は見当らない。

次のトラブルは試合中に起った。一つは塾の鈴木との試合中の早稲田の某君は塾陣営に向けガアと咽喉を鳴らして痰を吐いたのである、もう一つは塾の富田と対戦した某君はいきなり富田の横面を張ったのである。然るに何れの場合も審判はこれを見無視し何等注意も与えず、飯塚師範の抗議もあったのに引分を宣した。これ等のトラブルは

先鋒 本 塾

今川 敏夫(初)	引分	浦島 常規	新堀 昇之(初)	押込	○小田佐太郎(2)
佐野 隆則(2)	引分	田中 春雄(2)	富沢 康吉(2)	引分	小田佐太郎(2)
佐久間知三(初)	押込	○田崎 誠次(2)	鈴木 俊吉(初)	小内刈	○山田 実(2)
城崎栄之助(初)	引分	田崎	加藤 靖夫(2)	引分	山田
古張 信二(初)	引分	難波 秀雄(初)	杉山 嘉雄(2)	引分	長野 義雄(初)
石井 芳雄(初)	引分	酒井 舜平(初)	○富田 忠三(2)	押込	吉田 次郎(2)
○渡辺 重雄(2)	大外刈	桜井 尚雄(2)	富田	引分	五十嵐正雄(初)
渡辺	引分	小野寺喜徳(2)	沖 草作(2)	小外合技	○高山森一郎(2)
野田 一(初)	引分	宮田 晴明(2)	○上妻 利雄(3)	大外巻	高山
吉田 重成(2)	引分	砥石 二郎(2)	○上妻	横四方	前田 貞一(3)
沢海 東助(初)	内股返	○小玉 正巳(初)	大将 崎 幸男(3)	引分	引分
横田喜一郎(2)	引分	小玉	不戦	大将	赤山 政治(4)
					泉 忠保(3)
					宇山 利雄(3)
					前田 貞一(3)

2 ・ 11	5 ・ 10	6 ・ 6	11 ・ 1	11 ・ 3	2 ・ 11	6 ・ 4	6 ・ 30	昭7 ・ 1
<p>様、朝食を道場で摂れる様準備され、稽古の後、一風呂浴びた半白の先輩から幼稚舎生まで温い味噌汁に舌鼓を打つ塾柔道部ならでわの光景となった。参加者約百三十名、皆勤者先輩九名、現部員八十八名、精勤者七名。</p> <p><b>卒業生送別紅白勝負</b> 恒例行事の他、飯塚、中野両師範統祝賀会が併せ行われた。この日、夜来の白雪は三寸程綱町クラウンドを覆い清々しく道場を明るくした。飯塚先生二十五年、中野先生十五年の祝賀は林塾長、板倉体育会長、金沢柔友会長、柴田柔道部長等を始め旧部員百名、現部員約五百名が参加して行われた。この日柔道部並に柔友会より飯塚先生にブロンズの先生の胸像、中野先生には塾章入三組大銀盃が贈られた。</p> <p><b>新入部員歓迎紅白勝負</b></p> <p><b>第二十四回四校連合對抗試合</b> 場所不詳各々五十名、三将以上を残して勝つ</p> <p><b>第四十一回大会</b> 普通部対商工学校定期戦は普通部大将を残して勝つ</p> <p><b>北陸地方武者修行</b> 松本―長野―長岡―新潟―会津若松。</p> <p>この武者修行を行う動機となったのは一勝二敗の後をうけた早高、慶子戦が突如中止となり、その鬱憤を晴らすため、選手有志十四名が参加し六日間行われた。一行は崎、上妻、加藤、沖、伊藤、杉山、二樋口、横田、永井、古張、今川、安東、(松本から五島昌兄弟が加わる。)</p> <p><b>寒稽古</b> 皆勤者一〇五名</p> <p><b>卒業生送別紅白試合</b> 恒例、幼成年組紅白試合及卒業生掛勝負に続き飯塚師範と五島三雄五段の古式の形があり、芝口(今の新橋)の太田屋で送別宴あり列席者約六十名</p> <p><b>第二十一回対四校連合試合</b> 於綱町道場、久しく敗戦の苦杯を嘗めて来た連合軍は、此の一戦に大将、農大の中田三段は、塾の副将五島(勇)三段並に大将沖三段をそれぞれ見事な小内返と大内返に破り、積年の屈辱を晴らした。</p> <p><b>対四校連合試合中止の決議</b> 決議文 一、従来継続せる慶応義塾対四校連合柔道試合は今年(第二十一回)を以て中止す。一、本連合試合に代り、参加校の親睦を図り、本試合の歴史を持統する為、明年度よりは六月第一土曜日慶応義塾道場に於て、各校選手十名を以て(段級を合せる)リーグ戦を挙行し、終了後混合稽古並に親睦晚餐会を行ふ。</p> <p><b>第四十二回大会</b> 普通部対商工定期戦は大将同志戦で商工の小西和夫が普通部の飯田武二を破って優勝</p>								